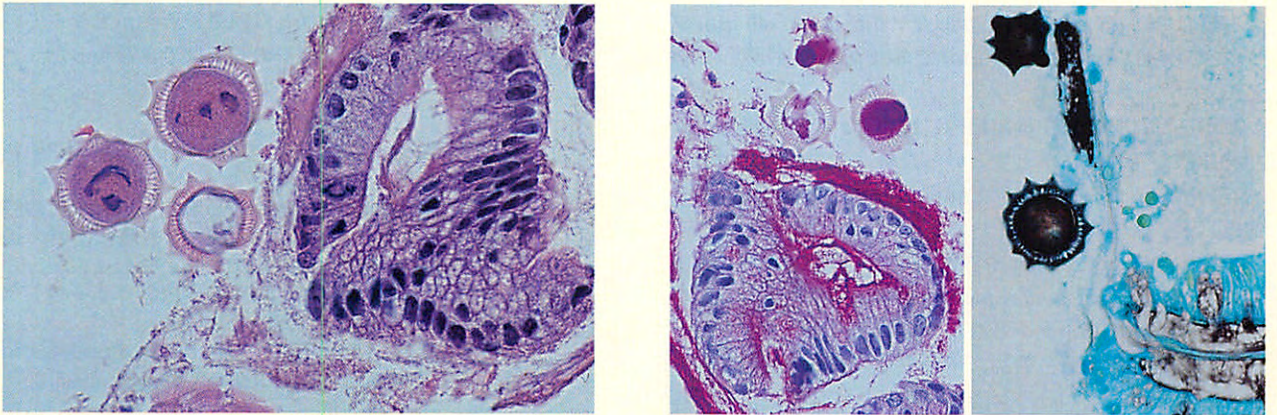


VII. 病原体と紛らわしい構造物



胃生検に混入した花粉(HE 染色, PAS 染色と Grocott 染色)

症例は 50 歳男性。胃潰瘍の診断のもとに内視鏡的胃生検が施行された。粘膜表面に小さな棘のある好酸性球形構造物が観察される。棘のある外皮と核様構造物のある内皮の二重構造を示している。外皮と内皮の間には、格子状構造がみられる。内皮および内皮内容物は PAS 染色陽性を示す。Grocott 染色では、内皮・外皮ともに陽性を呈する。この花粉は、組織底面にも付着していた。患者が花粉のついた食べ物を生で食べた可能性より、固定前の組織片を花卉の上に落とした可能性を考えたほうがよいかもしれない。花粉の種類は未同定である(三重大病理, 白石泰三博士のご厚意による)。